

戊辰戦争の記念碑

この石碑は、徳川幕府軍と王政復古を支持する新政府軍との間で起こった戊辰戦争（1868-1869）に参戦した松本藩士 261 名を記念するものである。戊辰戦争は明治維新の第一段階であり、徳川幕府を崩壊させ、社会と政治に大きな変化をもたらした、明治維新の急速な工業化の先駆けとなった。

18 世紀末から 19 世紀初頭にかけて、徳川幕府は飢饉、インフレ、農民一揆と戦ってきた。幕府に対する不満は、武士階級の間でも高まっていた。下級武士の多くは困窮し、家族を養うのがやっとの状態であった。社会的地位が高いはずの武士が、劣るとされていた商人たちから借金をするようになった。

1853 年、アメリカ海軍のペリー提督（1794-1858）が軍艦を率いて江戸湾に来航し、幕府にアメリカとの貿易の開放を要求すると、徳川幕府はさらに動揺した。1854 年、幕府はこれに応じ、外国勢力との不平等な貿易協定の第一号に調印した。このような譲歩は、幕府への批判を高めた。

徳川幕府への不信と反外国感情は、不満を持つ大名や没下級武士や浪人の一派を刺激し、幕府を倒し、何世紀にもわたってほとんど政治力を持たなかった天皇を復権させることを目指させることになった。このような動きを見て、最後の将軍である徳川慶喜（1837-1913）はその地位を辞し、政治的権限を天皇に移した。

しかし、それでも朝廷派は、徳川家から爵位や所領を剥奪しようとした。薩摩藩の武士たちは、民衆に恐怖を与え、将軍への支持を弱めるために、江戸での襲撃、放火、殺人などの密かな作戦を始めた。これに対し、慶喜は京都の朝廷に兵士を派遣し、天皇に抗議する手紙を出した。しかし、慶喜の使者は討幕派に拒否され、戦闘が始まった。これが戊辰戦争の始まりである。

西日本では朝廷側が急速に支持を広げたが、中部・北部の大名は分裂していた。松本の大名はどちらにつくか迷ったが、1868 年 2 月 29 日、朝廷派を支援することに決めた。

1868 年 5 月 3 日、慶喜は幕府の行政の中心である江戸城を戦わずして明け渡した。それでも戦いは続き、新政府軍は旧幕府軍を北と東に追撃した。1868 年秋、幕府の強力な支持者の多くが降伏し、残党は北海道南部に逃れた。結局、戊辰戦争は 1869 年 5 月 20 日、旧幕府軍は降伏し、終結した。

この碑の表面には、北越、会津、宇都宮（東京の北と北西の地域）での松本勢の戦闘について記されている。裏面には 261 人の侍の名前、位置、運命が刻まれている。